



写真3 チー・ミン宅裏のヤシの木と水路

返すのか。自分が食べ終わった後にも、食を介した命の循環がある。チン〔2019〕が述べているとおり、人間には特別な地位にあるわけではなく、世界を制作するマルチスピーシーズ・ワールドを生きているのだと実感し

た。翌朝、明るくなってから外に出ると、家の裏のヤシの根元に転がった殻に、アリが群がっていた。

引用文献

- General Statistics Office of Vietnam (GSO). 2022. Area, Population and Population Density by Province. <<https://www.gso.gov.vn/en/px-web/?pxid=E0201&theme=Population%20and%20Employment>> (最終閲覧日2022年10月25日)
- チン, アナ. 2019. 『マツタケ不確定な時代を生きる術』赤嶺淳訳, みすず書房.
- 原田 保・宮本文宏. 2015. 「第4章 スローフードのスタイルデザイン」原田保・庄司真人・青山忠靖編『食文化のスタイルデザイン―“地域”と“生活”からのコンテキスト転換』大学教育出版, 86-102.
- 鷺田清一編. 2003. 『〈食〉は病んでいるか―揺らぐ生存の条件』ウェッジ選書.

東ブータンの森と農

―「オーガニック」の源流とその先―

生 駒 忠 大 *

見上げれば空だけが広がるヒマラヤの大地に身を置くこと5ヵ月。来たばかりの頃は、洗い流そうとしていた爪の間に入った泥が、もう気にならなくなった。

ここは、ブータン王国（以下、ブータン）の東の端にぽつんとある集落である。集落の

村民は、そのほとんどが親族関係にある。斜面上に点在する豪壮な屋敷の土壁には、朱・黄等の明るい装飾が施される。村人の多くは、屋敷のまわりに小さな畑を構え、季節折々の野良仕事に明け暮れる農民だ。

わたしは、村人の「農」を中心とする暮ら

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

しと、「有機農業（オーガニック）」化を謳う政策との関係を調査し、双方の懸隔の接続を促す方策を模索しようと、このプータンに降り立ったのだった。¹⁾

渡ブ以前は、フィリピンのアンティケ州で約2年、宮崎県綾町で150日程度フィールドワークを実施していた。²⁾ 地域農業の発展に関与するアクターと「共に汗を流す」こと、これが、わたしが大切にしてきたフィールドワークの態度である。いま滞在している集落では、壮年のJ氏（30代、男性）を実質的な世帯主とする個人宅に滞在し、近隣の村人と野良仕事に取り組んでいる。

この国の中央政府は、1961年の農業省の設立とともに、工業化や商業化を企図する「農業近代化」へ舵をきった。しかし農業は、農民の生活そのものであり続ける。村人の生活と暮らしは、いまでも風土を利用し、かつその制約を強く受けたものである。「伝統的」な農法を礎とし、世代を超えて蓄積されてきた知恵に大きく依存しているのだ。



写真1 J氏が管理する水田における田植え

「オーガニック」化の旗を掲げた為政者は、市場や政策といった外からの干渉を経験してこなかったこの国の農業に注目した。そして、国際的に「環境にやさしい」「健康的」「小農に利益的」といったワードを伴って高揚してきた「自然共生型の農業（＝オーガニック）」の到達点に近いと目算したのだった。

本稿では、この集落の農業がいかに周囲の森と強く結びついているかについて簡単に述べ、「オーガニック」との結びつきを考えることにしたい。

ソクシン

集落は、定住者が急な勾配の森林に覆われた土地をようやく切り拓いて形成された。つまり、集落は森の中にあり、そこに住まう村人の農業システムは、森の存在を前提としている。

集落では、「ソクシン *sok shing*」と呼ばれるブナ科が卓越する林がある。村人は、先祖の資産として農地や屋敷とともにこのソクシンを代々受け継いできた。ソクシンは、こじんまりした林の一角であることもあれば、一度入れば出口を見失ってしまうような深淵な森の一端であることもある。目を見張るほどの巨木が鎮座していることも珍しくない。また、人が頻繁に出入りする林床には道が形成されるため、ソクシンは地域の回廊としても

1) プータン政府は2012年、2020年までに化学合成農薬・化成肥料・遺伝子組み換え技術の不使用を意味する完全「オーガニック」農業国の実現を目指すと国際社会に唱えた。国土の農地を完全に「オーガニック」化させるという目標は、プータンを先駆者として、スリランカ、キルギス等にも波及している。
2) フィリピンにおける実践型研究については、拙稿「生駒2022」を参照いただきたい。

意味がある。

ソクシンは、田畑への落葉の供給源として、地域農業を支えている。冬季、村人はソクシンに入って落ち葉をかき集め、牛の寝床として牛舎に貯蔵するのだ。わたしはプータンではまだ経験していないが、落葉のかき集めは、近隣村民で助け合っておこなう冬季最大の作業と聞いている。

観察していると、ソクシンをもつ村人が田畑へ人為的に投入する肥料は、おおまかに「森林－牛舎－畑」と「森林－水田」の2つの系に分かれているようである。畑には、メイズ（トウモロコシ）やジャガイモ等の基幹作物や、カリフラワーやブロッコリー等の最近普及してきた換金野菜の作付け前に、牛舎から落葉や作物残さの混ざった牛糞を施用する。地拵え前の水田へは、ソクシンで集められた落葉がそのまま持ち込まれる。ちなみに、糞を提供してくれる牛は、村人によってソクシンよりも少し奥まった林や草地に放さ

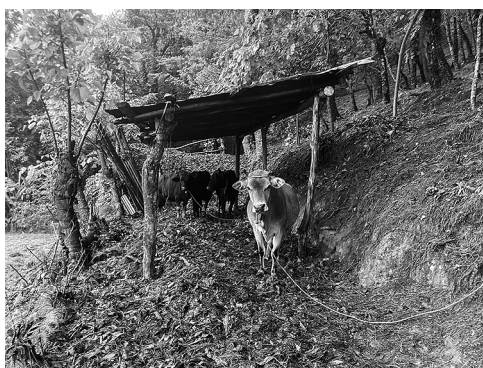


写真2 ソクシンとメイズ畑の境界にある牛舎
(右側にソクシン、左側にメイズ畑が広がる)

れ、植物を食べて育つ。このように、農業の物質循環サイクルに森がわかりやすく関係している。

湧水がもたらす稲作

フィールドを含むプータン東部では、古くから焼畑（ツェリ *tsheri*）がおこなわれてきた [Roder *et al.* 1992]。焼畑では、ソバ、ヒエ等の雑穀が栽培されてきたが [Akamatsu 2012]、現在の集落では、雑穀の重要性が水稻にほぼ置き換わっている。しかし水稻作には、山水を引くことが欠かせなかった。

集落の水田は、屋敷と畑が広がるエリアから下方に、段々畑状に密集している。水利の利便性によってであろう。谷から湧く水は、尾根を越えるように設置されたセメント敷の灌漑水路を通り、水田へ引かれている。³⁾ 水は、上流にある他人の水田から、下流にある自分の水田に流れる。田の取水溝に流れ込む水を、「どこからくるのだろう」と少し遡ってみれば、山の水源まで辿ることができるほど、森と水田は近い。

この「水・水路」という地域村民のコモンズを、世代を超えて大切に使用していくためには、村人同士で「助け合い」をしていかなければならない。集落で水田をもつ約20世帯は、田植えが始まる前に労働を提供しあう。水路を塞いでしまうごみを取り除くためだ。灌漑の時期になると、水田所有者がこもごも順番に引水する、水路と水の管理責任者（チュニエル *chu nyer*）を設置する等、村人へ

3) この灌漑水路は、J氏が小学生の頃に村人の協働によって施設されたという。

平等に水が行き渡るような仕組みがあった。

ところが、いざその時期になると、引水の順番の裏売買や、畦や導水パイプの破壊等が発生し、やはり「助け合い」は簡単にはいかない。この初夏は、自分の取水口にちゃんと水が流れているかどうか、誰も導水パイプを引き抜きにこないか、監視しながら田で夜を明かす村人の懐中電灯がチラチラする夜が続いた。今年も限られた水をめぐる合戦は苛烈だったようである。

動物との駆け引き

ブータンの森は、村人の農業に必要な資源を賦存するだけでなく、獣との競争の空間でもある。獣害は、森を介して起こる村人と獣の駆け引きといってもいいかもしれない。この国では、信仰と法制度の観点から、動物を殺したり痛めつけたりすることは忌避されるべき行為であると村人の間に浸潤しており、表立っておこなえない。そのため、森からときに人里に降りてくる獣から田畑を守るためには、物理的に田畑を囲うか、見張って追い

返すほかない。だから、「電気柵やフェンスはもはや農業に欠かせない」と、村人は口を揃えて語るのである。

この地域一帯では、特にイノシシとヤマアラシによる被害が多い。ちょっと気を抜いて柵のメンテナンスを怠ると、田畑は荒らされてしまう。メイズや米の収穫が近づくと、村人はビニルシートで屋根を設けただけの簡易的な小屋で1ヵ月程度夜を明かしながら番人となる。夜間に森から人の世界に入り込む獣に声や音をもって警告し、かれらの世界へ追い返す。人間界と動物界の境界にある田畑では、たまにサルが出没することがある。また、空からやってくる鳥には、やっと実った米が食べられてしまう。サルや鳥に対しては、被害が甚大になる前に村人が収穫してしまうしか、今のところめばしい手立てがない。また、頻度は年に数回程度であるが、飼育されている牛がヒョウ、ユキヒョウまたトラに襲われることもある。

この夏には、近隣のメイズ畑はイノシシに掘り返され、丹精込めて育てたメイズは全て牛の餌となった。さらにJ氏の父親が所有する牛はヒョウに首を噛みちぎられ、翌朝息絶えた。こうした獣害は、村人が対面する最大の困難であり、農業に対する意欲を削ぎ取り、離村・離農の要因にもなっている。

「オーガニック」は森と農の関係を汲み取れるか？

以上簡単にみてきたように、村民の生業と密接な関係をもっているのが周囲の森である。森はいつも恩恵の源であったわけではな



写真3 高地集落から低地集落を望む風景

く、村の中で社会をつくらせ、また非人間の力をもって教訓をも与えてきた。それでも村人は、森とともに生きる以外に道はなく、またそれを選択してきたのである。

ブータン農林省 (Department of Agriculture: DoA) は、ホームページ上でオーガニックコンポストの製造者情報を公開した。⁴⁾「オーガニック農業のために、然るべきコンポストを使用しましょう」との周知であろう。しかし、村人は落葉や作物の残さと牛糞を使って、昔から天然のコンポストをつくってきたし、いまでも実践している。

国内で認証を得たオーガニック農園は、ハウス栽培を実施している箇所が多い。外の自然から遮断されたハウスの中で、いかにも日本の食卓にサラダとして出てきそうな新しい葉菜を栽培している。どれもいまの集落では見たことがない種類ばかりだ。

「環境にやさしい」等、甘い言葉で説明されてきた「オーガニック」。しかし、生産者がオーガニックを名乗るためには規格に則り、認証を得なければならない。投入資材や

栽培条件の「有無」を論拠とする「自然共生型の農業」の振興は、果たして森とともにある村人の暮らしと農を包括するのだろうか、それとも排除する結果となるのか。研究者や為政者は、国内農業は「デフォルト」で「オーガニック」であるという。であるのであればいま改めて、農民の足元を総合的に捉え、再評価するときにあるのではなからうか。わたしは、「森－農」の関係性に、ブータンの「オーガニック」の源流とその未来があるように思えてならない。

引用文献

- Akamatsu, Y. 2012. Agricultural History and Current Rural Life in Khaling, Trashigang, Bhutan, *J. Agrofor. Environ.* 6(2): 45–48.
- Roder, W., E. Anderhalden, P. Gurung and P. Dukpa. 1992. Potato Intercropping Systems with Maize and Faba Bean. *American Journal of Potato Research* 69: 195–202.
- 生駒忠大. 2022. 「フィリピン・アンティケ州における有機農業普及に関する実践型地域研究—協働者としての農業普及指導員の役割に関する試論」『アジア・アフリカ地域研究』22(1): 1–35.

4) “Location and Contact details of Organic Fertilizer Producers in Bhutan.” (2022年8月) 〈<https://www.doa.gov.bt/location-and-contact-details-of-organic-fertilizer-producers-in-bhutan/>〉(最終閲覧日 2022年10月25日)